

《書評》『函館・ロシア その交流の軌跡』

清水 恵著

著者の清水恵氏は2004年10月に45才の若さで世を去った。大学卒業後、函館市立道南青年の家(旧ロシア領事館)に勤務、やがて函館市総務部市史編さん事務局に配属された。本人も書き残しているように、「函館という土地で市の職員となり、歴史研究にまつわる部署に配置された幸運」によって研究成果を積み重ねることができた。ロシアをはじめ諸外国との「交流の軌跡があちこちに眠っていた」函館の街の歴史を掘り起こし、特に力を注いだのは漁業で、「汲めども尽きない泉」に思われた。

そもそも函館はロシアとの因縁は深い。ロシア人がはじめて日本に居留したのは1858年(安政5年)で、日本で最初のロシア領事館が発足した函館の地であった。また、ロシア正教会の最初の教会が建てられたのも函館である。

著者はあらゆる分野でその日露交流の歴史を掘り起こした。たとえばロシア料理。1863年にオープンした「ロシアホテル」は日本ではじめてのロシア料理店で、その由来も紹介され、また1859年に来函したイギリス領事ホジソンの滞在記にもその様子が披露されているという。また市民も親露的で、函館の経済的基盤となっていたのが露領漁業であるとしても、たとえば大正5年(1918年)第4回日露協約が調印されると、戸毎に日露の国旗が飾られ、ロシア副領事を迎えた祝賀会にはロシア語を話す芸者衆もいたという。明治45年(1912年)にはすでにロシア語のガイドブック『函館案内』が出ている。商売(漁業)のためもあったとしても先駆的である。なお印刷は東京となっており、函館にはまだロシア文字の活字がなかったのだろうという、著者のコメントも面白い。

著者の念願であった露領漁業と函館の調査・研究についてはやはりこの本の圧巻といえるだろう。榎本武揚特命全権大使を代表とする明治初期のカラフト漁業権をめぐるロシア側との交渉をはじめとする歴史を、あらゆる資料を駆使して読者の興味を引きつける。

函館の漁業の盛運を引っ張っていたセミョーノフ商会、デンビー商会の苦闘の記述も詳しい。

日露戦争前の日本人の生活は貧しく、それにくらべセミョーノフ商会、デンビー商会は豊かな財力をもって労働者の大手雇用にもなり、周辺の日本人の生活を助けてもいた。北海道に住んでいたロシア人の大多数が函館であったということもうなずける。サハリン周辺の漁場の開拓の道筋をつけたのも同商会である。また函館港の海外貿易にも道をひろげ、第一次世界大戦のときなど25万円弱の鮭缶詰がロシア軍用としてウラジヴォストクへ向けられ、またイギリスへは33万円ほど輸出したというのも、このロシア人経営の会社であった。

日露戦争、ロシア革命、日本のシベリヤ出兵などが色濃く影を落としているこの時期は、日本人ロシア人ともに苦難の年月であった。それら個々人の運命をその子孫を訪ね数多くのインタビューをとおして書かれ、読む者の心に残るものだ。著者は彼らの人生の跡を追ひ、視点を変えて歴史を見る大切さを教えてもくれる。

著者の亡きあと、その早世を悼む知人友人によってまとめられたのがこの一冊の本である。日本とロシアとの交流のはじまりを知る上でも一読をお薦めします。(波)

2005年12月 函館日口交流史研究会刊 2000円(税込)